

サハ共和国・ヤクーツクだより ⑦

杉嶋俊夫

前号に続き、6月中旬以降に現地で体験したことを記していきます。

大学で私が担当する授業は6月上旬で終わりましたので、たびたび街に出られるようになりました。6月は前号でも触れた極北芸術文化大学の催しに参加する機会が何度かあり、バレエ劇場では、小さいスペースを借りて同大学の学生たちによるミニ・ファッションショーが行われました(写真1)。学生の作品とはいってもなかなかのレベルで、斬新なデザインのもの、近未来的なものなどがあり、短時間でしたが楽しいひとときでした。同じ頃、国立図書館でサハの伝統衣装に関する新著のプレゼンテーションがあり、そちらでは伝統的な衣服の美しさを堪能しました。

それらと前後して、ドイツ人作家の小説をもとに作られた映画の上映会と小説の朗読会が行われました。その作家自身がヤクーツクを皮切りにロシア各地で上映会を行うというプロジェクトで、彼は伝統文化が強く残るサハで現地の人々と交流できたことをとても喜んでいました。じつはその映画は、サハと同じトルコ系のシベリアの民族が住む町でドイツ人ビジネスマンが現地の女性と恋に落ちるといったストーリーで、意外性の塊のようなユニークな作品でした。サハを舞台に

こういう作品を作っても面白いかなと思いました。

市内にある世界諸民族口琴博物館では、私がお世話になった北東連邦大学の留学生・外国人教師らを集めて、歌と口琴とサハの伝統文化をテーマにした交流会が行われました(写真2。口琴については、わりい184号参照)。多言語が飛び交う空間で遊び、踊る若者たちの姿は、ほのぼのとしていて心安らぐものでし



2 ホムス(口琴)博物館・国際交流の集い

“ひも巻き競争”の様子。長さ5mぐらいのひもの両端を持ち、早く巻き込んでいって先に真ん中の目印まで巻いたほうが勝ち、というゲーム。サハの伝統的な遊びのひとつだそうです。向かって左側はトルコ、右側はベトナムの留学生。



1 学生ファッションショー

極北芸術文化大学の学生たちが自分でデザインした衣服のミニ発表会。伝統的なスタイルのもの、モダンなものなど、目を楽しませてくれる作品の連続でした。ショー以外にもこうした作品がもっと人々の目に触れる機会があったら楽しいだろうなと感じました。



3 北方諸民族言語文化学部の夏至まつり

ヤクーツク市から車で西へ一時間ほど行った自然の豊かな場所で教員20名、学生15名程度でこじんまりと過ごしました。この写真は、女性学生たちによるオープニングの踊り。踊りの動作のひとつひとつに意味があるとのことでした。

た。意外なことにその催しは実験的に今回初めて行われたとのことでした。

毎年、6月に入ると、サハ共和国の各地で夏至まつり(馬乳酒まつり)が行われます。サハの文化の象徴ともいべき重要な行事です。いわば(伝統文化においては)正月の意味を持つお祭りで、地域によってスタイルに多少の違いがあるようです。私は6月中旬と月末に一回ずつ参加することができました。前者は、北東連邦大学の北方諸民族言語文化学部の教員たちが身内で行なっているもので、学生たちの踊りでスタート、教員らのスピーチ、学生による歌や口琴の演奏と続き、最後はみなが輪になって踊りました(写真3)。町から会場までは車で往復2時間、道が悪く、座席から何度まころげ落ちそうになりましたが、それも楽しい思い出になりました。

後者の夏至まつりは、国外でも知られる有名なもので、昨年、前述の、輪になって踊る踊りの人数の世界記録で、ギネスブックに載りました。この月末に行われる祭りは様々な企業や団体の宣伝も兼ねており、物品の販売もあちこちで行われていました。この祭りに合わせてユーラシア諸民族のファッションショーも行われました。日本からも若い女性デザイナーが出品されていて、少しだけご本人とお話できました。

6月末は白夜で、夜になっても日が沈みません。祭りの一日目の深夜、明るい屋外で伝統的な儀式が始まりました。しきたりにのっとって会場の中心で祈りの儀式が行われ、集まった人々が日の出を迎えます(写真4)。この一種神秘的な光景は一生忘れないでしょう。二日目もスポーツを中心に様々な催しが行われたのですが残念ながら参加できませんでした。

翌月、大学の教員たちの業務はほとんど終わっていましたが、同僚たちのいない職場で最後の仕事を片付けているうちに帰国の日がやってきました。その数日間、あまり寂しさを感じる暇もありませんでしたが、ヤクーツクで過ごした4か月弱の時間が今、意外な形で私に影響を及ぼしています。では、今回はこのへんで・・・。

*サハや北極圏の自然と人々の暮らしを伝える Galya Morell さんのホームページ (<http://galyamorrell.com>) をご紹介します。ぜひ一度ご覧ください。



4

ヤクーツク市郊外の夏至まつり

毎年恒例のサハ最大(?)の夏至まつり。必ず土日の二日間かけて行われます。この写真は、土曜の深夜3時頃、地平線から上がってくる太陽に手のひらを向けて立つ人々。こうしてエネルギーをいただくのだそうです。



5

白夜

ヤクーツクは5月から昼(明るい時間)が夜よりも長くなり、夏至の時期は白夜になり、日が沈みません。この写真は6月中旬に寮の自分の部屋から撮ったもの。同じ時間帯でも日によって雲の形が違い、度々この窓から写真を撮りました。思い出深い写真です。

杉嶋俊夫 略歴:東京都町田市生まれ。千葉大学卒。大学で認知心理学を専攻、途中で言語学に転向、シベリア先住民の言語を学ぶ。院在籍時に西シベリア・トムスクの大学に留学したことがきっかけで、トムスク市やロシア西部・リャザン市にある大学で日本語を教える。今回の派遣も、リャザン大学の時と同じ日露青年交流センターの派遣プログラムによる。